

集団生活の充実を図る道徳科の指導と評価について

～包括的アプローチを活用した事例研究～

Guidance and Evaluation of Moral Lessons intended

for The Enhancement of Group Life

～A Case study Using a Comprehensive Approach～

江戸川区教育委員会 坂口 幸恵

【要旨】

コロナ禍という現在の情勢困難下において「集団生活の充実」を育成する道徳科の指導の在り方を探るには、アメリカにおける包括的アプローチである PBIS(ポジティブな行動介入と支援)を活用した学校全体での取組とリンクさせることが効果的であると考えられる。

道徳科の指導では、「森の絵」を教材とし、児童の集団生活の充実に関わる意識調査を踏まえ、「集団の一員として自己の役割と責任を果たす」とことと「和を尊重し、集団生活の向上に貢献する」という視点を取り入れた授業展開を実施した。評価法としては、児童の発言や記述を分析するとともに、一人一人に面接を行い、個に応じた認め、励ます個人内評価を実践した。

今後も、情勢困難下に生きる児童生徒だからこそ集団や社会との関わりの尊さを実感させ、自らの所属する集団の充実を目指していこうとする意欲を高める道徳科の実践を積み重ねていく。

キーワード：集団生活の充実、包括的アプローチ、PBIS、認め、励ます個人内評価

1 問題の所在と研究の目的

学校教育のよさは、集団の中で協働的な学びが行われることにありと考える。だが現在は、コロナ禍でソーシャルディスタンスに配慮するあまり、探究的な学習や体験活動等、子供同士、あるいは多様な他者と協働する学びが阻まれている。新しい生活様式にこだわるあまり、活発なペアワークやグループ討議が減少し、旧態依然とした一斉授業に陥ってしまい、児童生徒同士の交流が十分でない授業が散見される。現場の教員が苦悩しているのは現実の問題である。

学校は集団での学びを体験する場である。学校生活において集団の一員としての自覚を促すためには、学級や学年、委員会やクラブ・部活動など、児童生徒が様々な集団に属し、集団と個の在り方を考え、望ましい在り方を身に付けていく場の充実が必要である。コロ

実践研究論文

ナ禍であるからこそ児童生徒の日常生活の場면을意図的・計画的に設定し、集団と個の基本的な在り方を身に付けさせていくことが肝要である。そのためには、教員相互が内容項目「集団生活の充実」についての共通理解を図ることが前提になる。その上で、段階的な児童生徒への道徳性の育成をしていくことが求められる。まず、第一段階として「集団の意義を理解する」、第二段階として「集団の一員としての自己の役割と責任を自覚する」、さらに第三段階として「和を尊重して集団生活の向上に貢献する」段階を押さえて指導することが涵養であると考えられる。

集団生活の充実を図る指導としては、アメリカにおける包括的アプローチ¹が参考になる。PBISは、2010年から2016年まで実践されたアメリカにおける包括的アプローチを遂行するシステムの1つである。この実践では、学校全体における取組を核としたポジティブな行動介入と支援を行う。こうしたポジティブな生徒指導についての考え方は、日本でも、集団指導と個別指導の指導原理として、「成長を促す指導」(一次的支援)、「予防的な指導」(二次的支援)、「課題解決的な指導」(三次的支援)が『生徒指導提要』²に記載されており、これらの支援を総合的に行う重要性が示されており、コロナ禍でのポジティブな行動介入と支援に大いに役立つと考える。中でも、栗原慎二³の日本における包括的アプローチが参考になる。アメリカの多様な専門家によるチーム支援に対して、栗原は、日本の教職員による協働性の高さを生かして、子供たちの「個の成長」と「集団の成長」を育成していくために、目的・情報・方針を共有し、役割を分担することを提案している。

以上を踏まえ、先行研究から「集団生活の充実」についての道徳的価値の分析を行うとともに、学習指導要領解説で本内容項目についての児童生徒の実態や発達の段階に応じた道徳科の指導と評価の在り方について検討し、「集団生活の充実を図る道徳科の指導と評価」を提案したいと考え、本主題を設定した。

2 「集団生活の充実」についての道徳的価値の研究と分析

道徳科で「集団生活の充実」を主題に扱うとき、道徳的価値についての分析及び発達段階に応じた指導の在り方を追求することが求められる。学習指導要領の解説を基盤とするのは勿論であるが、「集団生活の充実」の概念を考えるにあたって、金井肇⁴の「集団と個」を基盤に据えることとした。

金井は、社会集団を基礎的社会集団と機能的社會集団とに類別している。指導に当たっては、まず、「集団の意義と目的を理解する」こと、次に、「集団の一員として自己の役割と責任を果たす」と「和を尊重し、集団生活の向上に貢献する」ことという段階的な指導を提唱している。

学習指導要領でも、「集団の意義・目的の理解」から「役割と責任を果たす」へ、そして「集団生活の充実に努める」に続くとして同様の段階を踏んでいる。金井の考えを基盤に、包括的アプローチを道徳科の指導でも活用したいと考えた。

アメリカにおける包括的アプローチは、児童生徒の行動の改善のために効果的な取組としてPBISというポジティブな行動介入と支援を提唱している。この実践は、学校全体での取組を核として、「期待行動を教えて認める」「期待行動の支援を日頃からする」ようにするものであり、日本においても取り入れていきたいと考えた。

そこで筆者は、アメリカの包括的アプローチの考えを日本の教育状況を踏まえてカスタ

実践研究論文

マイズした栗原の PBIS(ポジティブな行動介入と支援)が、現在の情勢困難下において「集団生活の充実」を育成する道徳科の指導の在り方を探る上で大いに生かすべきであると考えた。また、「集団生活の充実」についての児童生徒の発達段階を考えるに当たっては、小学校高学年や中学校段階では学習指導要領にも記載されている「集団の一員としての所属間や一体感を強く求め、排他的になってしまったりする」時期であることとの関わりをpushしていくことが重要である。コロナ禍の今こそ道徳科の授業を要として、人とのつながりや関わりを育む実践を積み重ねていくことが必要である。そこで本研究では、実践授業及び児童生徒の意識調査を活用した道徳科の指導と評価の在り方を検証する。

3 道徳科授業の実践

(1) 「よりよい学校生活、集団生活の充実」についての教科書教材の分析

本研究の実践では、小学校高学年に着目することとした。そこで、小学校高学年の「よりよい学校生活、集団生活の充実」を主題とする教科書会社8社の24教材の傾向を分析した。その結果、学校行事に関わる内容を扱った教材が12と最も多かった。取り上げられている学校行事には、運動会、学芸会、6年生を送る会、お別れ給食会、宿泊体験、学修発表会、感謝する会などがあつた。その中で、学芸会における役割について扱った教材「森の絵」が3社で掲載されていた。次に、委員会活動の内容の教材で、6教材であつた。委員会活動としては、環境委員会、栽培委員会、美化委員会、図書委員会、飼育委員会などが扱われている。

学校行事は、児童生徒の学校生活における一大イベントであり、最も関心が高く、年間の目標ともいふべき学習活動である。学習発表会(学芸会)は、高学年の児童にとって小学校生活の集大成ともいふべき行事であり、やりたい役割、なりたい配役になれるか否かは大きな分岐点になる。だが、何事も全てうまくいくことはなく、自分の思い描く役割が担えない場合の方が多いのも現実である。教材「森の絵」は、主人公の生き方を共感的に受け止めさせつつ、集団生活の充実を図るために何をすべきかを考えさせるのに適切なものである。

そこで、本研究では教育出版発行の「はばたこう明日へ」⁵の教科書教材小学校5年に掲載されている「森の絵」を活用することとした。本教材は、学習発表会でやることになった「森は生きている」の劇において、主人公のえり子は女王役を希望していたが、同じ役を希望していためぐみにその役を譲つた。えり子は、役を譲つたものの自分の役割に意欲がもてないでいた。そんな時、クラスの文男が衣装係として一生懸命に仕事をしている姿を見る。文男の「だれかがやらないと、劇にならないじゃないか」という言葉を聞き、えり子は、少しずつ自分の役割に対して責任をもって取り組むことの大切さに気付いていく。集団の一員として役割と責任を果たすことの大切さについて考えさせていくことができる教材である。

(2) 主題「集団生活の充実」に関わる児童生徒の意識調査

事前指導として、内閣府の「小・中学生の意識に関する調査」⁶(平成25年)を参考に児童が学校生活を楽しんでいるかについて調べた。この調査は、対象児童が3年生の時にも行つており、比較することができた。内閣府の全国結果は、楽しいが80.6%、

実践研究論文

まあ楽しいが16、2%、あまり楽しくないが2、8%、楽しくないが0、5%である。授業研究を実施する対象児童の調査結果(3年生→5年生)は、楽しいが85%→78%、まあ楽しいが10%→15%、あまり楽しくないが3%→5%、楽しくないが2%→2%であった。3年生の時と比較すると5年生の現在は低下していることが分かる。全国調査と比較しても、楽しいと感じる度合いがやや低いと感じる。

そこで、調査後に個別の面接を実施したところ、「ソーシャルディスタンスで3年生の時のように学校で思う存分遊べなくなった」「給食でみんなと話すのが楽しみだったのに黙食になってしまった」等の不満の声が複数寄せられた。この意識調査の結果から児童の学校生活での満足度が低下していることが分かる。コロナ禍の中にあって先行き不透明な状況下では人々の不安が高まりやすい。このような時にこそ、集団の中での帰属意識を高め、進んで役割を果たすことが必要であると考え。帰属意識を高め、児童生徒に進んで役割を果たし、集団生活を向上させようとする心情を育むことは喫緊の課題であると受け止める。

(3) 包括的アプローチの取組「みんな楽しく」

包括的アプローチの取組は、2021年4月から江戸川区立S小学校で行った。ここでは「安全」「思いやり」「責任」の3観点から、学校生活における望ましい集団生活7場面での行動を掲げ、学校教育全体を通しての道徳教育の取組として「みんな楽しく」と名付けて実践した。

7場面の望ましい集団生活の行動様式については、各学級で話し合ったのち、学級委員会での話し合いで決定した。

	授業中	休み時間	給食	掃除	登下校	クラブ	委員会
安全	正しい姿勢、机の整頓	静かに右側通行、廊下は走らない	手洗い、清潔に配膳、黙食	整理整頓、教室を清潔に	右側通行、信号を守る、横に広がらない	器具を正しく使う、時間を守る	人員点呼し、安全に活動する
思いやり	友達が間違えても笑わない	低学年に遊び場を譲る	好き嫌いをせず食べる、班で協力	班で協力して掃除をする	先生や友達にあつたら挨拶する	部員が協力して助け合う	委員相互が協力して活動する
責任	学習課題をきちんとやり遂げる	使ったボールを片付ける	自分の仕事を忘れず行う	自分の役割をきちんと行う	交通ルールを守り、寄り道しない、通学路を歩く	互いに助け合い、協力して活動する	互いを尊重し、協働して委員会活動をする

栗原の提唱するPBISは、全ての児童生徒に対して、あらゆる場所で提供される予防的・開発的な介入であり、学級全体や学校全体として取り組むものである。PBISのチーム支援

実践研究論文

においては、「目的の共有」「情報の共有」「方針の共有」「役割の分担」が重要である。目的や情報等の共有のためには、これらの内容が明文化されていること、チェックリスト体制が整備されているという仕組みが必要である。PBISは、ポジティブな働きかけで適応行動の増加を図り、結果的に問題行動を減らすという生徒指導のアプローチでもある。実践校では、教員の指導の下、学級委員会が母体となり、「みんな楽しく」の活動を推進した。本実践の定着には、教職員や児童相互の強化(認め合う・賞賛する)による毎月の学級委員会からのメダル授与がとても効果的であることが分かった。

(4) 包括的アプローチの視点を踏まえた指導と評価の工夫

集団生活の充実についての意識調査及び実践授業は、江戸川区立S小学校5年生2学級で、2021年5月に実施した。

実践授業をするにあたっては、中心発問において「自分の希望する役割になれなかったらどうするか」を児童一人一人に自我関与させながら話し合わせることを通して、集団生活の充実を図ろうとする心情を養う授業構成を考えた。

また、展開後段では、クラスや学校で役割を果たしていくために留意することを意識化させることで、自分の問題として捉えるように工夫した。

評価については、集団生活の充実についての意識調査を比較分析した上で個人面接を行い、児童一人一人を認め、励ます個人内評価を行うこととした。

さらに、学校教育全体で取り組んだ道徳教育での包括的アプローチ「みんな楽しく」とリンクさせ、一人一人の児童の集団生活での関わりについて分析をした。

(5) 主題名「集団生活の充実」についての授業実践

① ねらい

希望通りになれなかったえり子の気持ちや行動が変化した理由について話し合うことを通して、集団の中で自分の役割を自覚して、集団生活の充実に努めようとする実践意欲と態度を育てる。

② 学習指導過程

段階	学 習 活 動 ○主な発問◎中心発問 ・児童生徒の反応	☆指導上の留意点 ※資料・準備物 ◇評価
導入	1 役割についての今の自分の考えを確認する。 ○自分がやりたくない役割をやらなくてはいけないうき、どうしますか。 ・自分がやらなければならないなら、なんとか頑張ってやる。 ・始めはやる気が出ないかもしれないけど、試練だと思って乗り切る。 ・嫌だが、やると決めたら覚悟してやる。	☆ねらいとする道徳的価値「集団生活の充実」を考えさせるにあたって「自分の役割」について想起させることで価値への動機づけを図る。

<p>展</p> <p>開</p>	<p>2 教材「森の絵」を読んで、話し合う。</p> <p>○ えり子さんが絵筆を持つ手に力が入らなかった理由は何でしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の希望する女王役になれなかった。 ・女王役をめぐみさんに譲ったけれど、あきらめきれない。 <p>○ えり子さんと文男さんとめぐみさんは、行動や考え方にどんな違いがあったのか。</p> <p>〈えり子〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の希望する役になれず、意欲的に役割を果たせないでいた。 ・もやもやする気持ちのまま、自分の事しか考えていない。 <p>〈文男〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・希望した係でなくても、自分の役割を果たしている。 ・誰かがやらなくては、劇が成立しない。 ・衣装係で、放課後や早朝にも作業した。 <p>〈めぐみ〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・希望した女王役になれ、劇の練習でどんどんうまくなった。 ・昼休みは熱心に録音を手伝った。 <p>◎ 自分の希望する役割になれなかったとき、どんな思いでどんな行動をすればよいか。えり子さんが気付いたのは何か。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・希望する役になれなくても、自分の役割を精いっぱい果たすことが大切だ。文男さんは責任感がある。 ・えり子さんが最初に自分のことしか考えていない。思いやりに欠ける。 ・一人一人が役割を自覚してチームワークよく協力することで、よい劇を作る。 <p>3 よりよい学校生活をみんなでつくりていくために大切なことを話し合う。</p> <p>○ クラスや学校で役割を果たしていくには、どんなことに気を付けていくか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当番活動など、今自分が担当している仕事を頑張って、みんな楽しくなりたい。 ・安全・思いやり・責任を考えて行動する。 ・嫌な仕事でも、クラスやみんなのために 	<p>※教師が範読する。</p> <p>☆主人公の気持ちに十分共感させ、実際の学校生活においても起こりうることに気付かせる。</p> <p>☆文男の言葉が、主人公の変容のきっかけになったことを捉えさせる。</p> <p>☆三人の考え方の違いを出させ、比較させることを通して、児童一人一人の考えを深めさせる。</p> <p>☆中心発問で、ロールプレイングをさせて、主人公の考えの変化が本人にもクラスにもよい結果となったことを理解させる。</p> <p>※ロールプレイングの発言、ワークシートへの記述</p> <p>◇集団の中で自分の役割を自覚して、集団生活の充実に努めることの大切さについての考えを深めているか。</p> <p>☆「役割」についての自分の考えをまとめさせる。包括的アプローチとの関連を図る。</p> <p>◇学校全体での包括的アプローチと関連させ、自分の経験と照らし合わせながら友達の経験を聞いたりすることで、自分との関わりでねらいとする価値を捉えることができているか。</p>
-------------------	---	--

	頑張っていきたい。	
終末	4 教師の説話を聞く。 ○本時を振り返り、振り返りシートに記述する。	☆教師自身の体験に基づく集団生活の充実についての出来事を話す。 ※振り返りシート ◇集団生活の充実に努めることについて、自分のこととして考えているか。

評価の視点としては、次の3点を挙げた。

- 発問や中心発問において、役割について児童が自我関与し、よりよい集団生活を目指していこうとする意欲が感じられる発言が聞かれたか。
- 展開後段で、クラスや学校で役割を果たしていくために留意することを意識化し、自分の問題として捉えることができたか。
- ロールプレイを通して、集団生活の充実に目指し、自分はどのように役割を果たし、チームワークよく協力していくのか、考えを深めることができたか。

授業観察の観点は次の2点を挙げた。

- 「集団生活の充実」を目指し、役割について児童が自我関与し、意欲を発露する発言や記述が捉えられたか。
- 展開における発問の構成は、ねらいとする価値へ迫るために適切であったか。

③ 展開段階の主な発問についての授業記録(小学5年1学級の抜粋)

- えり子さんが絵筆を持つ手に力が入らなかったのはなぜでしょうか。
 - ・自分の希望する女王役ではないのでやる気になれない。
 - ・しぶしぶ女王役をめぐみさんに譲ったけれど、本当は自分がやりたかった。
 - ・なぜ私は台詞がうまくできななかったのか。もっと練習して恵さんに勝ちたかった。
- えり子さんと文男さんとめぐみさんは、行動や考え方にどんな違いがあったでしょう。
 - 〈えり子〉
 - ・自分の希望する役になれなかったから、進んで自分の役割を果たせないでいた。
 - ・もやもやする気持ちが強く、自分の事しか考えていない。思いやりに欠けている。
 - ・文男さんの言葉から、自分の考えを変えるようになった。
 - ・私も背景の絵を頑張って、みんながあっと驚くような素敵な森の絵を描こう。
 - 〈文男〉
 - ・刺繍は自分の役割だから、慣れない手つきだけど、一針一針丁寧に縫っている。
 - ・誰かがやらないと、劇にならないじゃないかと自分を励まして頑張っている。
 - ・衣装係として、放課後や早朝にも黙々と作業していて、責任感がある。
 - ・みんなの劇を何とか成功させたい。
 - ・人は一人では生きられない。みんなで協力していくことが必要だと思う。
 - 〈めぐみ〉
 - ・希望した女王役になれ、劇の練習でどんどんうまくなっていった。

実践研究論文

- ・裏方も頑張りながら、台詞の練習もしている。劇はチームワークが大切。
 - ・劇を成功させようと、昼休みには、放送室で熱心に録音を手伝っている。
 - ・一生懸命取り組み、みんなのために頑張っている。
- ◎自分の希望する役割になれなかったとき、どんな思いでどんな行動をすればよいのでしょうか。えり子さんが気付いたことについて話し合みましょう。
- ・自分に与えられた役割を受け止め、みんなのために責任をもって行動しよう。
 - ・もう決まったことだし、気持ちを切り替えて頑張ろう。自分のやりたくない役割だけど、責任を果たして頑張ればやればやりがいも出てくるだろう。「みんな楽しく」の活動でも、みんなのために思いやりをもって行動すれば気分もいい。
 - ・任された仕事を最後まで責任をもってやり遂げることが大切だと思う。一人一人が自分の役割を自覚してチームワークよく協力しあっていくことで、よりよい劇になっていくと思う。

授業実践の抜粋記録から児童生徒の発言・記録を分析すると、初発の発問では主人公の自分勝手な言動に批判的な発言が多く出されていた。しかし、中心発問になるとよりよい集団を目指そうとする意欲が芽生え、「みんなのために」という発言が多く出され、思いやりの気持ちが表現されるようになった。また、包括的アプローチの取組「みんな楽しく」と関連させた「責任」「思いやり」等の発言も多く出されるようになった。これらの発言や記述から、「集団生活の充実」の道徳的価値についての理解が深まったと受け止める。

④ 実践授業の成果と課題

実践授業の成果と課題についてまとめる。まず成果は、次の4点である。

- 適時性のある教材を活用することで、道徳的価値についての自我関与が高まった…コロナ禍で集団での関わりが不十分になり、児童相互が関わりの大切さを意識できにくくなっている中で、学習発表会で役割を果たすことの大切さを考えさせる道徳科授業でロールプレイを取り入れて自我関与させることで、ねらいとする価値についての理解が深まり、生き方についてのかかわりを意識できるようになった。
- 児童の発言やワークシートへの記述のキーワードを焦点化し、価値理解を深めた…初発の発問では主人公の自分勝手な言動に着目させ、教材における問題意識をもたせた。さらに中心発問ではワークシートに自分の考えを記述し、ロールプレイをさせ、主な登場人物3人についての言動を比較させることで、主題名について多面的・多角的に児童の考えを広めることができた。
- 生き方とのかかわりを捉えて考えることができた…終末で振り返りシートに記述することで、自らの生き方と関わらせて考えさせることができた。特に、「今日の授業で、「これから～していきたい」という気持ちをふくらませることができた」の自己評価を重視し、ねらいとする価値への実践意欲の高まりを把握することがとできた。
- コロナ禍前の2019年と今年度と同じアンケート調査をすることで、児童の変容を把握した授業展開ができた…2019年5月の調査では、「3年生になって理科の勉強が始まり、校庭の花や虫を観察するのが楽しい」「総合の学習で1年生に読み聞かせをしたのがうれしい」「遠足の時、グループで風鈴づくりをしたのがよかった」等、集団生活の大

実践研究論文

切さに気付き、充実させていこうとする意欲が感じられる発言が多く聞かれた。一方、2021年5月の調査では、「去年から学芸会もなくなり、運動会も縮小されて悲しかった。やっぱり、みんなと一緒に協力して行事を成功させていきたい」「音楽でみんなと合唱をしたい。体育でもポートボールやタグラグビーを思い切りしたい」等、集団での関わりが十分でないことへの不満があったものの、「去年と違って今年は学校に登校できて、みんなと一緒に勉強できるから楽しい」「ソーシャルディスタンスはあっても、みんなに会えるから学校は楽しい」等、全体としては8割近い児童が学校生活を楽しいと感じているのも事実である。さらに、授業観察で注目した3人の抽出児童を分析した。一昨年から集団関与が芳しくなかったN児に授業後に面接をしたところ、「今年は展覧会でみんなと協力してクラス作品を完成させたい。僕は、丁寧に色を塗るのが得意だからその力を出したい」と答えた。同じく一昨年から集団での関わりに消極的であったU児に授業後に面接をすると、「コロナ禍でも新しい生活様式を守って、みんなと関わりながら学校生活を過ごしたい」と答えた。さらに、集団との関わりが一貫して高かったY児においても面接では今の状況を窮屈だと感じていることが分かり、道徳科において「集団生活の充実」を主題名に学習活動に取り組む大切さを実感した。この面接結果を今後の道徳科において意図的指名やロールプレイの指名に生かしていくことが効果的であると考えられる。

課題としては、次の1点である。

○道徳教育での「包括的アプローチ」と道徳科での「包括的アプローチの視点を取り入れた授業」とをリンクさせることが求められる…包括的アプローチは、日常からのポジティブな行動介入と支援によって児童生徒の適応行動の増加を図るものである。こうした道徳的実践を道徳科の授業とどのようにリンクさせるかが課題である。自校の児童生徒の実態を踏まえ、どの主題名で連携を図るのか、年間計画ではどこに位置付けるのか意図的・計画的に設定していくことが求められる。大切なことは眼前の児童生徒が集団での関わりを楽しいと感じ、積極的に取り組んでいこうとする意欲を高める道徳科授業を構築していくことである。本区でも今年度から児童生徒一人一台のタブレットが配布され、日々の授業での活用はもとより、遠隔授業でも対応できるようになった。タブレットを生かした道徳科実践も各地区で散見されるようになった。今後も、コロナ禍の第4波が起こることを想定して新しい生活様式を取り入れ、先を見通した実践を積み上げていくことが肝要である。

4 研究の成果と課題

本研究では、「集団生活の充実を図る道徳科の指導と評価について」を主題に、包括的アプローチを活用した道徳科の指導法を展開しながら、児童生徒の実態に応じた評価法を工夫し、「集団生活の充実」を「集団の一員として自己の役割と責任を果たす」と「和を尊重し、集団生活の向上に貢献する」という視点に着目しながら授業検証を行った。

研究の成果は次の2点である。

① 「集団生活の充実」についての道徳的価値理解の深まり…学習指導要領解説書の道徳的価値分析を基盤に、米国の包括的アプローチを活用することで、自己の責任と役割を意識した集団での関わり方を考えていく意欲が見られる授業実践となった。

実践研究論文

② 児童生徒の意識調査を活用した指導と評価…授業者がしっかりとねらいとする道徳的価値についての評価基準をもち、児童生徒の集団生活の充実に関わる経年の意識調査を活用し、個別の面接を実施したことで、認め、励ます個人内評価をすることができた。

課題は、次の2点である。

① 内容項目に特化した指導法の開発…本研究では、「集団生活の充実」を主題とした道徳科の指導法として、児童生徒の集団生活の充実に関わる経年の意識調査を活用し、「森の絵」を教材に、児童の発言や記述を分析し、「集団の一員として自己の役割と責任を果たす」と「和を尊重し、集団生活の向上に貢献する」という授業展開を行った。他の内容項目においても、それぞれの道徳的価値での効果的な指導法があるのかを探求したい。

② 測定資料を活用した認め、励ます個人内評価の開発…評価については、客観的な見取りを念頭において、自尊感情に関わる経年の意識調査を活用して個別の面接調査を行った。新学習指導要領では、道徳科の評価は数値によらず観点別評価もしないと明記されているが、道徳科の目標が児童生徒の道徳性の育成にある以上、授業者は学習者の道徳性の発達段階を把握する必要がある。とりわけ客観的資料としての意識調査などの測定資料を指導に活用していくことが、児童生徒の道徳性を育むことにつながると考える。そこで、他の内容項目の指導においても様々な診断テストを活用したり、道徳科の授業でのアンケート調査を活用したりして、児童生徒の道徳性を客観的に測定していくことが求められると考える。

今後も、様々な手法を創意工夫し、児童生徒の道徳性を育む指導と評価の在り方について検討を進めていく考えである。

5 まとめ

児童生徒に「集団生活の充実」を図ろうとする意欲を高めるためには、まずは指導者である教師自身が自分の所属する学校に愛着をもち、進んで自己の役割を果たそうと意欲的に学校生活を送っていることが前提になる。その上で、道徳科の授業者として、明確な「集団生活の充実」についての道徳的価値理解の基に、眼前の児童生徒の実態に即した指導構想を立て、実践を積み上げていくことが求められる。

本研究では、「集団生活の充実」を図る上で、包括的アプローチを活用した道徳科の指導法を展開しながら、児童生徒の実態に応じた評価法を工夫し、「集団生活の充実」を「集団の一員として自己の役割と責任を果たす」と「和を尊重し、集団生活の向上に貢献する」という視点に着目しながら授業検証を行ったが、導入した包括的アプローチの取り組みが十分に生かされていなかった部分もある。道徳科を要として、日常の生活で様々な集団に所属した時に、その集団に適した人間としての在り方についても考えていくことが必要だと考える。

今後も、人格の完成を目指す学校教育の中核を果たすのが道徳教育であることを肝に銘じ、情勢困難下に生きる児童生徒だからこそ、「和を尊重」して「集団生活の充実」を目指していこうとする意欲を高める道徳科の実践を積み重ねていきたい。

実践研究論文

参考文献

- 1 長江綾子・山崎茜・中村孝・枝廣和憲・エリクソン ユキコ・栗原慎二「米国における包括的アプローチに関する一考察－PBISの視点から－」(学校教育実践学研究、2013年、第19巻), p73-82。
- 2 文部科学省『生徒指導提要』(教育図書株式会社、2010年)、p14-20。
- 3 栗原慎二『PBIS 実践マニュアル&実践集』(ほんの森出版、2018年)、p4-8。
- 4 金井肇『双書=中学校の道徳指導2 道徳授業の多様な展開』(明治図書、1984年)、p130-138。
- 5 小学校教科書(教育出版『はばたこう明日へ』5年、2019年)、p70-75。
- 6 内閣府『平成25年 小・中学校の意識に関する調査』(内閣府、2014年)、p42-43。